

宮本亜門は埼玉で人気があるんだ。 この劇場でやってくれよ。



のすごくさかっただけで、その大変さはすごく分かる。

M アメリカはバトンを引張る人はバトンしかさわらない。この人にはこのお金が払われていて、ここでというように恐ろしい分担作業が出来ているので、それをどうやるかですね。正直に言うと、何回も愕然とさせられました。

N 自分の領域を越えてはやってくれないよね。ある仕事の時に怒ったら、向こうの責任者が何人か残って手伝ってくれました。時には議論を激しく戦わなくてはだめな時もありますね。

M それは、イギリス人たちの役者に対しても日本人と接し方は同じですか。何か自分の中で変えることはあるのですか。

N あるよ。まずディスカッションをやるということを感じなければならぬです。例えば、彩の国さいたま芸術劇場でやった『リア王』で、ナイジェル・ホーソンは稽古が始まると必ず、「蜷川、5分時間をくれ」と言う。「ちょっと幕開きの演技について考えたのだけれど……」とまず意見を言って、妻が最近死んだ老人としてやってみたいと言う。僕は「どっちでもいいよな」と正直思っているが、「ああ、そうかその可能性はあるね。やってみようか」とやってみるがうまくいかない。その日はその通りにやって、翌日また、「蜷川、5分くれ」と、もう2週間ぐらいオープニングが自分でも気に入らなくて、「この人はこうやって作っているのだからそれに立ち会うよりしょうがないなあ」と思うようにしました。

M 日本人でそういつてきたらどうします。

N 「もう、決めよう」という感じ。(笑い)つまり、日本人には暗黙の了解があるからそれで通用するのだけれど、イギリス人とはそれが有り得ないから徹底的に話し合うより仕方がないのです。それにはものすごく時間を食うが、他者と他者が会おうためにはそのくらいの苦労は当然。キャリア

をきちっと全うしなくてはいけない人たちは仕事に真剣なわけで、だからお互いちゃんと話し合う。それを全員についてやらなければならないのが、日本でやる時とは一番違う。けれど外国で仕事をするので、他者と出会うためにより丁寧にやることに僕は自覚的になったかな。物などをぶつけていたら関係が壊れてしまう。

M それをやって、今度、日本の役者とやった時に日本の役者に対して思うことはありますか。

N もうちょっと論理的に突きつめて欲しいと思います。そのことを抜きにしてずいぶんやってきているから。だから役者に言うよ。「今はきちっと戯曲を分析しろ。あなたはここに登場する何分前にどこにいて何をして、何をしゃべっていたのだ。その続きでここに出てこい」と。

M 一応僕はそのことをやっていますけれど。

N やっているんだ。ではオーソドックスにやっているんだ。

M 案外古典的なんですよ。

N そうだね。そうではないと思った。

M どんなふうに演出しているかと思っていたのですか。

N もっと感覚で。

M 絶対そうではないかと思ったんだよね。この前蜷川さんの衣裳も担当している前田文子さんと一緒にの時に、文子さんから「蜷川さんが稽古場で「俺は亜門みたいに転換だけうまくないから」と言った」と聞きました。(笑い)

死より、自分のジャッジが 狂うことの方が心配

N 次の作品は準備している?

M 今年はタン・ドゥンのオペラ『TEA』を、アメリカのサンタフェで上演します。

N それは新しい作品なんだね。

M そうです。現代オペラです。ジャンル



を越えるのが好きなんです。蜷川さんは最近の作品数は異常ですよ。これはどうして?

N いつ死んでも大丈夫なように、やりたいたいことをやるんだよ。

M 蜷川さんに聞きたいのは、今、死というものに対してはどう思っていますか。

N それは来たらしょうがないと思っています。イギリスのナショナルシアターで『近松心中物語』をやっている時に、胃潰瘍で2週間ぐらい物を食べられなくて吐きっぱなしで、ホテルに寝ていて真っ暗にしていると、寝ている自分の姿が何となく浮かんでいて。そういうことを通過してきたから、死ぬというのはあっちに行ったり、こっちに行ったりでそんなに大したことはないかもなあ自分で思った。だから時期が来たらそれはしょうがない。それまで何が心配というのは鼻っばしらが強く、自分の仕事を誇れる作品が自分の眼で見えていつまで作れる、そのジャッジは自分でやっていて、そのジャッジが狂っていたら終わりだが、狂わない準備はしているので大丈夫だとは思。それだけが心配で、死ぬとかはどうでもいいかなあと思っている。

M 僕もジャッジが狂っていたらできないですよ。

N 舞台稽古で「ああ、ここまでだなあ」と思わない? 「失敗したなあ」って、ゲネプロで思わない?

M 思わない。

N ええっ、幸せだな。

M ゲネプロでは思わないが、初日が開いた後に思う。稽古場の後半になると客観性がどんどん出てくるのではないですか。初日が開いた後「もう少し、こういうのがあったのかなあ」とかいろいろ違うアイデアが出てきたり、演技でももう少しここはこうだったと思うことはあります。

N 僕はゲネプロでだいたい決着が着いている。「ああ、俺の才能もここまでか」「〇〇が悪いからこの作品はメチャクチャだよな。でも言えねえな」と思ったりするが、「これは世界中で俺しかできない」と思うことはない?

M 僕も同じです。そういう意味では自分が天才ではないかと思う時もあります。

N どんな時に思った。

M 今も思っていますよ。僕は「これが」ということは思わないし、これが失敗だともあまり思わないタイプです。もしかして世間で失敗だと思われるものでもいとおしく愛情が入っているから。

N それは変態だろう。

M たから変だと最初から言っているではないですか。だからこうやって仕事が出来ているんだもの。蜷川さんは自分が普通の人だと思っているのですか。(笑い) 観客のみなさんも普通ではないと思っていて、今日は見世物小屋を見るような気

■ 演出家 宮本亜門

1958年生まれ、東京都出身。出演者、振付師を経て、2年間ロンドン、ニューヨークに留学。帰国後の1987年にオリジナルミュージカル『アイ・ガット・マーマン』でデビュー。翌88年には、同作品で「昭和63年度文化庁芸術祭賞」を受賞。ミュージカルのみならず、ストレートプレイ、オペラ等、現在最も注目される演出家として、活動の場を広げている。2004年秋には、ニューヨークのオンブロードウェイにて『太平洋序曲』を東洋人初の演出として手がけ、05年同作はトニー賞の4部門でノミネートされる。昨年は、演出したオペラ『コジ・ファン・トゥッテ』が文化庁芸術祭大賞を受賞。今年1月にブロードウェイ・ミュージカル『スウィーニー・トッド』を上演し、7月に米国・ニューメキシコ、The Santa Fe Operaでタン・ドゥン作曲オペラ『TEA』、11月にはミュージカル『テイク・フライト』を上演予定。

■ (財)埼玉芸術文化振興財団芸術監督・演出家 蜷川幸雄

埼玉県川口市出身。シェイクスピアはもとより、ギリシャ悲劇から日本の古典・現代劇まで幅広く手がけ、数々の名舞台を世界に送り出している。昨年4月には「さいたまゴールド・シアター」の活動を開始。6月には、イギリスでのRSC主催ザ・コンプリートワークスに日本で唯一招待され「タイタス・アンドロニカス」を上演し、絶賛を浴びた。まさに世界を舞台に疾走し続ける演出家。2006年、第5回朝日舞台芸術賞特別大賞、第13回読売演劇大賞・大賞、最優秀演出家賞受賞。

分で来ているはずですよ。

N それは宮本亜門を見に来ているんだよ。今日はにぎわっているよ。埼玉で人気があるんだ。この劇場でやってくれよ。

M やりたいですよ。呼んで下さいよ。どこもすごくいい空間ですよ。

N 稽古場もいいよ。(拍手) すごくいいよ。宮本亜門でしかできない贅沢ない舞台をここで作って発信してよ。(拍手) 嫉妬はあるけれど、嫉妬はないんだよ。おかしい言い方だけれどそんなに強くないんだよ。

M もし僕がミュージカルでなくてストレートプレイをやりたいと言ったら嫌でしょう。

N そんなことはないよ。我慢する。(笑い)

M もう、最高! 蜷川さんて可愛い人ですよ。

2007.1.8 彩の国さいたま芸術劇場 小ホールにて



しまったら、周りは手が付けられない。だけどその熱さたるや、大したものて人を感動させる。僕はこれでいいんだなと思いました。彼らは全然すかしていないし、一流の人はやはりそこまで行き着いちゃうんでしょね。

N 優れた人間って、すごく開かれている所があったりして、ある所ではとっても親しみやすく、世界が共有出来たらすごくオープンになるが、それはやはりソンドハイムも同じなんだ。

論理でつきつめるのが 欧米流の演劇

N ブロードウェイではリハーサルはどういう所でやるの。

M タイムズスクエアの近くで、汚いビルの四階でした。日本でブロードウェイ、ブロードウェイと言われてすごく期待して行くでしょ。行くと稽古期間はない、お金はないし、舞台寸法は取れない稽古場で本当に苦しかったです。

N それは分かる。俺も初めてウエストエンドでやった時に「お金は使えないよ」と最初に言われた。日本ではアンダーグラウンドより商業演劇はお金が使えろが、それとは全く逆で、だからお金が使えなくても

やりたいですよ。呼んで下さいよ。
どこもすごくいい空間ですよ。